基礎老化研究　33(1);1－2,2009

【追　悼　文】

木谷健一センター長の御逝去を悼む

田中　愼
国立長寿医療センター加齢動物育成室

この度の木谷健一先生の突然の訃報は、驚くだけでなく、驚嘆時の人の反応を改めて知らされたものでした。2007年8月に宮石理先生を、本年10月には木谷先生を失い、今までにない狼狽に至りました。老化の研究など全くわからない素人を、何の才もないネズミ屋を、何とか導いて下さったお二人を相次いで失うことなど夢想だにしていなかっただけに、私の中では老化の研究で生きていくうえでの支柱が一気に崩れ、目標と基準を見えない果てに持っていかれた思いです。見上げ、追いかける目標なしに今後をどう過ごして良いのかさえわからなくなりました。怒りに似たものまで覚えました。

この度、基礎老化研究の編集部からお許しをいただきましたので私が見てきた木谷先生をお知らせし、追悼の詞にかえたいと思います。

木谷先生には敬称に類するものがいくつもありますが、ここでは2つを紹介し、私の上司としての称号を題とすることとしました。

国立療養所中部病院長寿医療研究センターの初代センター長となられる木谷先生と初めてお会いしたのは、1995年の春でした。阪神・淡路大震災やオウムサリン事件の余韻のある頃で、本郷の東大医学部の奥まったところにあった放射線管理学教室へ木谷先生を訪ねたときでした。何故自分が老人研から移ってきたか、我々が赴任するだろう大府のセンターの背景や老化研究と加齢動物育成施設:Aging Farmの大切さと難しさ、そしてネズミに詳しいことや方向性を失ったイヌのことなどを話して下さいました。と思います。というのは、木谷先生はコーヒー、ネスカフェのゴールドブレンドをいれて召し上がるのですが、コーヒー顆粒をがさがさカップへ入れ、ポットからじゃばじゃばお湯を注ぎ、無造作にカップを扱われるので辺りにいろいろ飛び散ることが気が気でなく、ほとんどお話に集中できなかったからです。この時のポットとカップは大府でもご愛用でした。次にお会いしたのは6月の半ばで、院長の井形昭弘先生、生体機能研究部の部長さんとなられる伊藤健吾先生もご一緒でした。ここで、センターの発足が木谷先生、伊藤先生、そして私の3人で行われることを知り、驚きました。次が、7月の辞令交付と開所式でした。次は8月に老化機構研究部長の磯部健一先生が着任された時でした。8月末に幕張で国際学会を主催されるというのでセンターにはほとんどいらっしゃらず、これを幸いと、唯一事務機器や部屋の設備の整っていたセンター長室を使わせていただきました。当時の中部病院ニュースに3健（2人の健一と健吾）で頑張ると書いておられました。Aging Farmの立ち上げには、本省から厚生局、そして事務まで万全のバックアップをいただきました。その甲斐あって1996年6月から実験動物施設棟の運用と加齢育成を始めることができました。その進行状況は、東邦大の後藤佐多良先生を班長とする長寿医療委託研究（成果の一部は、老化・老年病研究のための動物実験ガイドブック、日本基礎老化学会編、アドスリー、2008に収録）で報告していくこととなりましたが、生存曲線が描けないということで、木谷先生のご指示で宮石理先生からご指導をいただくこととなりました。加齢・老化研究におけるげっし目実験動物の使い方につき、木谷先生から詳細なご指導をいただいたのはこの頃でしたが、かなりの無理難題に見えました。加齢・老化をげっし目実験動物で捉えるには、最低でも4つの月齢群（3-4、10-12、20-24、26-30月齢）で比較し、加齢育成では30月齢の個体を安定して作出することが必要というものだったからです。また短寿命系統では、かえってわかりにくくなるというご指導と併せて、これらを理解するには、かなりの時間を要しました。学会等で2群比較では何も捕まらないと木谷先生からご指摘を受け、当惑された皆さんと同じ思いでした。しかし、不思議なもので今や40月齢の小型げっし目を得られないことこそが制約であり、限界としなくてはならないと思うようになりました。ここでの木谷先生は、老化研究因業教のご本尊様で、宮石理先生が氏子総代、私は入門したての信徒といった位置づけでした。宮石先生と私で奉った敬称でした。

もう一点、木谷先生からいただいた大きなご指導は国際性でした。1996年から長寿科学国際ワークショップを当センターで開催され、その間に国際外部評価も実施されました。内外の著名な老化を研究する皆さんが大府や名古屋に集われました。少し挙げても、D Harman、GO Ivy、BP Yu、MC Carrillo、HY Chung、SC Park など挙げきれないほどの先生方とお目にかかりました。木谷先生自らが親友と紹介下さり、老人研から持ち込んだ機械で実験をされたI.-Zs. Nagy先生とは実験動物を分け合うこともあり、特に親しくさせていただきましたし、追悼のメッセージをご遺族にお届けしました。忘れられないのは、Imre先生の最後の来所の総仕上げの発表会でした。木谷先生がスライドを持ち込んでImre先生に反論され、凄まじい激論を戦わせ始めました。このトークバトルは、センター長室でも続き、何度目かの絶交に至ったと思いますが、Imre先生がKen（健）とは20年来の親友だったのに、きっと疲れているんだと、辛そうに帰国されたのを忘れられません。失礼ながら、私が感動したのはこの間のお二人の英語でのやりとりです。あまりのかっこよさにうっとりと見るばかりでした。ア

ンソニーホプキンスとジャンギャバン（今ならオシム前監督です）が共演している映画を見るような錯覚に陥りました。唯、この映画が実際にあったらもっと静かかなぁ、と思ったものでした。Imre先生が悲嘆にくれたメイルを下さった気持ちがわかるとともに、あまりにうろたえて、意味の通じない文面を送った自分が恥ずかしくなりました。

木谷先生はもともと内科医から生理学へ進まれたとうかがいました。手先は器用でいらっしゃったようなのですが、大府へ来られてからはもっぱら指先が小さな紙くず作りに向けられていました。でも学会発表などは、きれいな実験をきれいなスライドで出され、ポスターやパワーポイントへの移行も支障ないようでした。が、これには裏があり、金井節子先生という手練がバックにいらっしゃいました。自他ともに一匹狼を認められた木谷先生でしたが、実に多くの方に支えられておいでだったと思います。そしてそれを心得ていらっしゃったと。この金井さんが一番といっていい手腕を振るわれたのが米国老年学会・米国加齢学会合同大会で木谷先生が賞を受けられたときです。何十年分の膨大なブルースライドからパワーポイントファイルを作られたとうかがいました。こうして受けられたのがHayflick賞だったことは、少し皮肉で、いかにも木谷先生らしいと思ったものです。かなり遅れてお祝いを申し上げましたが、おぉありがとう、とおっしゃった笑顔が忘れられません。

最後にお目にかかったのは2008年1月25日の日本基礎老化学会30周年記念集会でした。この時も講演の直前まで、金井先生が木谷先生の発表スライドを作っていらっしゃいました。

孤高の先生という表現を時々うかがいましたが、いつも周りに支えられ、その期待以上のことをして下さった先生でした。F344の亜系統名はすぐさま言えなくとも、きちんと特性の違いを理解しておられました。亜系統の変遷を学会発表から読み取っていらっしゃいました。実に希少な先生でした。学会場におられると煙たいような、それでいていらっしゃらないとつまらない、そんな先生でした。

もう少ししてお会いできたら、宮石先生はレッツスモークと、木谷先生は俺の使った系統って何だった、と言っていただけるでしょうか。Yes, we canとF344/CrlCrljですよ、という答えを準備しています。

木谷健一センター長

国立療養所中部病院長寿医療研究センターが
Aging Farmを育成した実験動物施設棟の玄関にて

1996.7.31